

「十字架の恵み」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 19：28～37

<導 入>

しばらく前に、NHKで「アウシュビッツ強制収容所」という特集番組がありました。第二次世界大戦の時、その収容所で110万人のユダヤ人が虐殺されました。それは、ヒトラーが率いるナチス・ドイツが行ったユダヤ民族の撲滅作戦の一環でした。今回の番組で取り上げられていたのは、“ゾンダー・コマンド”と呼ばれる人々でした。彼らはユダヤ人をガス室に送り込み、その遺体の処理をしていました。ナチスは、このユダヤ人の虐殺が明らかになるのを恐れ、戦争終了間際に建物を焼却し、“ゾンダー・コマンド”を殺害しました。ところが、彼らのうちの三人がガス室の地下に瓶や缶にメモを入れていました。今までそのメモは破損が著しく判読することが難しいとされていましたが、最新のデジタル技術によって読めるようになり、強制収容所での虐殺の様子が徐々に明らかになってきました。ゾンダー・コマンドと呼ばれる人々は14か国のユダヤ人からなり、自分の民族の撲滅の働きを担わされていました。ユダヤ人の幼い少年が言いました。「あなたがたもユダヤ人でしょう。仲間をガス室に送って、自分だけは助かるなんて、どうしてそんなことができるの？殺人者として生きることが、僕たちのいのちよりも大切なものなの？」。このような言葉をかけられたゾンダー・コマンドたちは、自分の民族を裏切った心の痛みに苦しみ続けました。

ローマ時代にも、ゾンダー・コマンドたち、いわゆる死刑執行人がいました。イエスの十字架の刑を執行したのは、ローマの兵士たちでした。イエスは、ローマの兵士たちの手によって十字架につけられました。イエスは、十字架につけられていた午前9時から午後3時までの6時間に、七つの言葉を語られたと、聖書は記しています。12時までに3つ、その後闇が全地をおおった後の3時間に4つの言葉を語られました。

今朝は、ヨハネ福音書から第5番目と第6番目の言葉を中心に、ローマの兵士たちが行ったことの意味を探っていきましょう。

I. イエスの苦しみ

▽ヨハネ19：28 イエスは、「わたしは渇く」と言われました。イエスの十字架上での第5番目の言葉です。この言葉は、イエスが人間として肉体的な苦痛を体験されたことを示します。十字架刑の苦痛に関して、ドイツの医師の医学報告（一部抜粋）があります。「神経や腱がいっぱいある両手両足に打ち込まれた釘は、このうえもない激しい苦悶をもたらした。露出した多くの傷口や裂傷は炎症を起こし、壊疽を生じさせ、それが苦痛に刻一刻と激しさを加えた。大動脈を通して頭や腹部に余りにも大量の血が入り込むので、頭の血管が圧迫され、膨れ上がる。血液の循環に支障が起こると、焦燥や不安を引き起こし、死そのものよりも耐え難くする。これらすべてに加えて、燃えるような激しい渇きがあった」。イエスは、このような肉体的な苦悩を体験されました。イエスは、人間を救おうとすれば人間が体験する苦悩を体験しなければなりません。ヨハネは、この言葉を記すことによって、イエスが人となられた救い主であり、イエスの苦しみが現実であったことを強調しました。もちろん、十字架の苦しみは肉体的な苦しみだけではありませんでした。心は人々から罵られ、辱められるという苦しみを味わわれました。罵られ、辱められることは、人の心にとってどんなにつらいことでしょうか。さらに、イエスには魂の苦痛もありました。それは、罪の重荷です。人々が神様から離れて、滅びに向かっているという罪の重荷です。肉体的な苦

痛だけでなく、心の苦痛や罪の重荷という苦痛、これらが同時にイエスに襲いかかっていたのです。イザヤが「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」と預言したとおり、イエスは私たちの痛みを体験されました（イザヤ53：4）。私たちであれば、到底耐えられなかったでしょう。「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい」（ローマ12：15）とありますように、イエスは私たちの苦痛を同じように体験されました。それは、私たちを愛する愛でしかありません。愛は、愛する相手と同じことを体験しようとし、それが喜びであろうと、悲しみや苦しみであろうと一緒に分かち合おうとします。愛は愛する者と同じ体験をし、一つになろうとします。これが、イエスの苦しみです。

II. 救いの完成

▽ヨハネ19：29 兵士たちは、「酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝につけて、イエスの口もとに」差し出しました。兵士たちは、肉体的な苦痛の中にあるイエスを見るに見かねて、それをやわらげようとしたと考えられます。彼らにも、いくらかのやさしさと同情心があったのかもしれませんが。イエスは十字架につけられる前にぶどう酒を飲ませられましたが、彼はなめただけで、飲もうとされなかったと、マタイ福音書に記されています（マタイ27：34）。しかしこの時は、ぶどう酒を受けられました。このことは、他の福音書には書かれていません。ヒソプは、聖書辞典によりますと、石垣や岩間に生育し、花と葉に香りがあり、副食物や薬用にされていたようですが、今日ではどの植物であるのかを特定することは難しいと言われていています。ただ、イスラエルの民たちがエジプトから解放された過越しの時には用いられました。出エジプト12：21～23 イスラエルの民たちは、過越しの小羊をほふり、ヒソプの束をその血に浸し、その血を鴨居と二本の門柱に塗りつけました。すると、初子を殺す死の使いが、その血を塗った家を過ぎ越し、その家の中にいる者は全員救われました。イスラエルの民を救ったのは、過越しの小羊の血でした。イスラエルの民の代わりに、小羊がほふられ、その血が滅びから救いました。私たちを罪から救うのは、イエスの血です。バプテスマのヨハネは、イエスを見て「見よ。世の罪を取り除く神の子羊」と言いました（ヨハネ1：29）。イエスは、私たちの身代わりとなって、私たちの罪のために死なれました。イエスの死は身代わりの死です。イエスは、私たちが生きるため身代わりとなり、死なれました。ヨハネ15：13 イエスは、友である私たちのためにいのちを十字架で捧げられました。これよりも大きな愛は誰も持っていません。イエスの十字架の死は、イエスの愛そのものです。私たちは、いのちをかけた愛で愛されているのです。あの過越しの時に、小羊の血を塗った家の中だけで救われたように、私たちはイエスを信じるだけで救われます。これは、神様の一方的な恵みです。イエスの十字架には、神様の愛と恵みがはっきりと現わされています。私たちはこのことを知り、頭で理解していると思っっているかもしれませんが、今一度十字架のもとに座って、神様の愛と恵みを深く味わいましょう。

▽ヨハネ19：30 イエスは、「完了した」と言われました。この言葉は、この福音書だけに記されていて、言い尽くせない深い内容を含んでいます。それは、①十字架による救いのみわざが完成したこと、②神様の人類の救いのご計画が完成されたこと、③旧約時代の救いに関する預言が成就したこと、④律法を守るというわざが終わったこと、⑤イエスの苦しみが終わったことなどの多くの意味が込められています。マルチン・ルターは、「この『完了した』ということばを私自身の慰めとしたい。キリストは律法の終わりであり、律法の要求するところをキリストが成し遂げてくださった」と言っています。要するに、イエスの十字架から、神様の恵みの時代が到来したのです。私たちはイエスの十字架を見上げるならば、律法に縛られることなく、神様の恵みに生きることができるのです。私たちの信仰は、イエスの十字架の恵みに建て上げられます。ヨハネ19：30「頭を垂れて霊をお渡しになった」という言葉の原語は、「心から自ら進んで霊をお渡しになった」という意味です。人は、自

分の死を選択することはできません。イエスは救いのみわざが完成したので、自発的に死を選択されました。イエスは「完了した」と言われた後に、「父よ。わが霊を御手にゆだねます」(ルカ23:46)という最後の言葉を語られると同時に、自分から死を選択され、ご自分の霊を神様の御手に渡されました。これは、救いのみわざが完成したという勝利の宣言です。イエスは、仕事を為し終えた者が安息し、「枕によりかかるように」、ご自分を神様の御手に委ねられました。

Ⅲ. 血と水

▽ヨハネ19:31~33 ローマ人たちが十字架刑を執行した場合には、罪人はたとえ死ぬまで何日かかろうとも十字架にかけられたままでした。しかも、十字架にかけられた罪人の死体を埋めることさえしませんでした。ただそれを取り下ろして放置するだけでした。あとは、ハゲタカやカラス、野良犬の餌食になるのにまかせられました。しかし、ユダヤの法律は違っていました。死体は、翌日まで十字架の上に留めておいてはならないと定められていました(申命記21:22, 23)。イエスが十字架で死なれた日は、「備えの日であり、翌日の安息日は大なる日」でした。安息日は、金曜日の日没とともに始まります。しかも、金曜日が過越しのための備えの日でした。イエスは午後三時に息を引き取られたので、日没までほんのわずかな時間しかありませんでした。そのため、罪人たちの足を木づちに打ち砕くことが行われました。イエスと一緒に十字架につけられた罪人たちには、それが実施されました。しかし、イエスはすでに死んでいたもので、骨は砕かれませんでした。ここでも、旧約聖書の預言が成就しました。「その骨は折ってはならない」(民数記9:12)とあり、イエスはその民を死から救う過越しの小羊と見られています。

▽ヨハネ19:34, 35 使徒ヨハネは、一人の兵士がした何気ないことを記しています。その兵士は、おそらくイエスが死んでいることを確かめるために、槍でイエスの脇腹を突き刺しました。すると、水と血が流れ出ました。35節で、使徒ヨハネはわざわざ「目撃した者の証しは真実である」と記し、目撃した者の証しを確証し、そこに深い意味を読み取っています。この現象について、ある本に、次のように書かれてありました。「その現象は正確につかみ得ないことですが、おそらくイエスは文字通り心臓破裂をおこして死んだのであろう。普通はもちろん、死後の死体から血は流れ出ないものです。この事態はイエスの体験が肉体的にも、感覚的にもあまりにも恐ろしいものであったので、イエスの心臓が破裂したことによって生じたものと考えられます。イエスが文字通りの意味で心臓破裂を起こして死んだと考えるのは、本当に胸が痛くなることです」と。しかしヨハネは、そのイエスから流れ出た「血と水」に、特に注目しています。「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません」(ヘブル9:22)、「いのちとして贖いをするのは血である」(新改訳レビ17:11)という御言葉から、「血」は罪の赦しの力を現わしていると理解できます。また水は、イエスがあのサマリヤの女に、「わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます」(ヨハネ4:14)と言われた言葉から、イエスにある新しい生命と捉えることができます。十字架には、罪赦されて神様に受け入れられる恵みと、イエスにある永遠のいのちの恵みがあります。十字架の豊かな恵みの流れです。私たちが十字架のもとに行く時、イエスのいのちをかけた愛とあふれる恵みに浴することができます。その流れは尽きぬことなく、永遠に流れてすべての人に及びます。最後に、18世紀のイギリスの讚美歌作者であったトブレディが歌った讚美歌をご紹介します。

「1. 千歳の岩よ わが身を囲め さかれし脇の 血しおと水に 罪もけがれも 洗いきよめよ 2. かよわき我は おきてにたえず もゆる心も たぎつ涙も 罪をあがのう力はあらず 3. 十字架のほかに 頼むかげなき わびしき我を あわれみたまえみ救いなくば 生くるすべなし 4. 世にあるうちも 世を去る時も 知らぬよみにもさばきの日にも 千歳の岩よ わが身を囲め」アーメン。